

源氏物語

桐壺

紫式部

與謝野晶子訳



紫のかがやく花と日の光思ひあはざる

ことわりもなし

(晶子)

どの天皇様の御代みよであつたか、女御によごとか更衣こういとかいわれる後宮こうぎゅうがおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵あいちようを得ている人があつた。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃たのむ所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬しつとの焰ほのおを燃やさないわけもなかつた。夜の御殿おとどの宿直所とのいどころから退さがる朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜くちおしがらせた恨みのせいもあつたかからだが弱くなつて、心細くなつた更衣は多く実家へ下がつてい

がちといふことになる、いよいよ帝はみかどこの人にばかり心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困つて、御覚醒かくせいになるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ちようあいぶりであつた。唐の国でもこの種類の寵姫ちようぎ、楊家ようかの女じよの出現によつて乱らんが醸かもされたなどと陰かげではいわれる。今やこの女性が一天下の煩わづわいだとされるに至つた。馬嵬ばかいの駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとつては堪えがたいような苦しい雰囲気ふんいきの中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言だいなごんはもう故人であつた。母の未亡人が生まれるのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手はでな家

の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生ぜんしんしょうの縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになった。寵姫を母とした御子みこを早く御覧おやこになりたい思召おぼしめしから、正規の日数が立つとすぐに更衣母子おやこを宮中へお招きになった。小皇子しょうおうじはいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚がいせきが背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌びぼうにならぶことがおできにならぬため、それは皇家おうけの長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子あいしとして非常に大事がっついておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の

女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女きじよと言つてよいほどのりっぱな女ではあつたが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになつて更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになつたりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになつて以後目に立つて重々しくお扱ひになつたから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれないと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持つていた。この人は帝の最もお若い時に入内じゅだいした最初の女御であつた。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかつた。この女御へ済まないという気も十分に持つてお

いでになつた。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としてゐる心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであつた。

住んでゐる御殿ごてんは御所の中の東北の隅すみのような桐壺きりつぼであつた。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊ろうを通い路みちにして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直とこのいをする更衣が上がり下がりして行く桐壺であつたから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量かさんでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾すそが一度でいたんでしまうようなことがあつたりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がささ

れてあつたり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わせて、桐壺の更衣の通り路みちをなくして辱はずかしめるようなことなどもしばしばあつた。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいつそう憐あわれを多くお加えになつて、清涼殿せいりょうでんに続いた後涼殿こうりょうでんに住んでいた更衣をほかへお移しになつて桐壺の更衣へ休息室としてお与えになつた。移された人の恨みほどの後宮こうきゆうよりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着はかまぎの式が行なわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手はでな準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌びぼうと聡明そうめいさが類のないものであつたから、だれも皇子を悪く思うことはできなかつ

た。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所みやすどころ——皇子女おうじじよの生母になった更衣はこう呼ばれるのである——はちよつとした病氣になつて、実家へさがらうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこかからだが悪いということはこの人の常のことになつていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみしてからにするがよい」

と言つておいでになるうちにしだいに悪くなつて、そうなつてからほんの五、六日のうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛じゆそが行なわれるかもしれない、皇子にまで禍わざわいを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、

目だたぬように御息所だけが退出するのであった。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人が非常に瘦やせてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱まつているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗まっくらになつた気があそばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうになつて寝ているのであつたから、これはどうなることであろうという不安がおおみこころ大御心を襲うた。更衣が宮中から

輦車れんしゃで出てよい御許可の宣旨せんじを役人へお下しになつたりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとおなたも約束したのだから、私を置いて家うちへ行つてしまうことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しそうにお顔を見て、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫つて来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言つて、なお帝にお言ひした

いことがありそうであるが、まったく気力はなくなつてしまつた。死ぬのであつたらこのまま自分のそばで死なせたいと帝はおぼしめ思召したが、今日から始めるはずの祈禱きとうも高僧たちが承つていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお帰しになつた。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であつた。帰つた更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰つて来るはずであるが、それすら返辭を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去かくれになりました」

と言つて、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ帰つて来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引きこもっておいでになった。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢けがれのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝の顔にも涙が流れてばかりいるのだけを不思議にお思ひになるふうであつた。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものはないかつた。

どんなに惜しい人でも遺骸いがいは遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになって、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣きこがれていた。そして葬送の女房の車

にしいて望んでいつしよに乗つて愛宕おたぎの野にいかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであらう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣さんみに三位を贈られたのであ

る。勅使がその宣命せんみょうを読んだ時ほど未亡人にとって悲しいこと

はなかつた。三位は女御によじに相当する位階である。生きていた日

に女御とも言わせなかつたことが帝みかどには残り多く思召されて贈

位を賜わたつたのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持った。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさな

どで憎むことのできなかつた人であると、今になつて桐壺の更衣こういの眞価を思い出していた。あまりにひどい御殊寵しゅちゆうぶりであつたからその当時は嫉妬しつとを感じたのであるとそれらの人は以前のことを思つていた。優しい同情深い女性であつたのを、帝付きの女官たちは皆恋しがつていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと見えた。時は人の悲しみにかわりもなく過ぎて七日七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに帝からはお弔いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日がたつていくにしたがつてどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであつて、女御、更衣を宿直とくのいに召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であつて、拝見する人までがしめつぽい心になる秋であつた。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶりね」

などと言つて、右大臣の娘の弘徽殿こきでんの女御にょじなどは今さえも嫉妬を捨てなかつた。帝は一の皇子を御覧になつても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになつて、親しい女官や、御自身のお乳母めのとなどをその家へおつかわしになつて若宮の様子を報告させておいでになつた。

野分のわきふうに風が出て肌寒はださむの覚えられる日の夕方に、平生よりもいつそう故人がお思われになつて、鞍負ゆげいの命婦みょうぶという人を使いとしてお出しになつた。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思いをしておいでになつた。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わつてすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠よむ歌なども平凡ではなかつた。彼女の幻は帝のお目に立ち添つて少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値

はないのである。

命婦は故大納言家だいなごんに着いて車が門から中へ引き入れられた刹那せつなからもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居すまいの外見などにもみすぼらしさがないようにと、りっぱな体裁を保つて暮らしていたのであるが、子を失った女主人おんなあるじの無明むみょうの日が続くようになってからは、しばらくのうち庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいつそう邸内が荒れた気するのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにもものが言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使い

が荒^{あば}ら屋へおいでくださるとまたいつそう自分が恥^ちずかしくて
なりません」

と言つて、實際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいつそうお気の毒になりました、
魂も消えるようでございますと、先日典侍^{ないしのすけ}は陛下へ申し上げて
いらつしやいましたが、私のようなあさはかな人間でもほん
とに悲しさが身にしみます」

と言つてから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われました
が、ようやく落ち着くとともに、どうしようもない悲しみを感
じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめ
て話し合う人があればいいのですがそれもありません。目だた
ぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見

ずにて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中においてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいつしよにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返っておいになつて、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子が
お気の毒で、ただおおよそだけを承つただけでまいりました」と言つて、また帝のお言づてことのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなつておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文ふみを拝見するのであつた。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであらうかと、そんなことを頼みにして日を送つていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困つたことである。どうしているかとばかり思

いやつてゐる小児こどもも、そろつた両親に育てられる幸福を失つたものであるから、子を失つたあなたに、せめてその子の代わりとして面倒めんどうを見てやつてくれることを頼む。
などこまごまと書いておありになつた。

宮城野みやぎのの露吹き結ぶ風の音おとに小萩こはぎが上を思ひこそやれ

という御歌もあつたが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかには拜見することができなかつた。

「長生きをするからこうした悲しい目にもあうのだと、それが世間の人の前に私をきまり悪くさせることなのでございますから、まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございます。もつたいない仰せを伺つてはいるのですが、私が伺候

いたしますことは今後も実行はできないでございましょう。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいりになりたい御様子をお見せになりますから、私はごもつともだとおかわいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてくださいませ。良人おつとも早く亡なくしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸づくめの私が御いっしょにおりますことは、若宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうお寝やすみになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したのでございませが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらつしやいま

すでしようから、それではあまりおそくなるでございましょう」と言つて命婦は歸りを急いだ。

「子をなくしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていたいただきたいのですから、公のお使いでなく、気楽なお気持ちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのですが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとは何ということでしょう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言だいなごんはいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思つたことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといつて今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、

何度も何度も遺言いたしました。が、確かな後援者なしの宮仕えは、かえつて娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましてはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすぼらしさも隠していただいて、娘はお仕えしていたのでしようが、皆さんの御嫉妬の積もつていくのが重荷になりまして、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえつて恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたしません」

こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返つてしまつたりしているうちにますます深更になつた。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生ぜんしようの約束で長くは

いつしよにおられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ、自分は即位してから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかつたという自信を持っていたが、あの人によつて負つてならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失つて、悲しみにくれて以前よりもつと愚劣な者になつているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであつたか知りたいとお話しになつて湿っぽい御様子ばかりをお見せになつています」

どちらも話すことにきりがない。命婦は泣く泣く、「もう非常に遅いようですから、復命は今晚のうちにしたいたしと存じますから」

と言つて、帰る仕度をした。落ちぎわに近い月夜の空が澄み切つた中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すような虫の聲が

するのであるから帰りにくい。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜飽かず降る涙かな

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音ねしげき浅茅生あさぢふに露置き添ふる雲の上人うへびと

かえつて御訪問が恨めしいと申し上げたいほどです」

と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈り物などする
場合でなかつたから、故人の形見ということにして、唐衣からぎぬと裳も
の一揃ひとそろえに、髪上げの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中

住まいをしなれていて、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝みかじの御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がごいつしよに上がっていることも、また世間に批難の材料を与えるようなものであろうし、またそれかといつて若宮とお別れしている苦痛にも堪たえきれぬ自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵よいのまままで御寢室へはいつておいでにならない帝を気の毒に思った。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらつしやるふうをあそばして凡庸でない女房四、五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろ始終帝の御覧になるものは、玄宗皇帝げんそうと楊貴妃ようきひの恋を題材にした白楽天の長恨歌ちやうこんかを、亭子院ていしんいんが絵にあそばして、伊勢いせや貫之つらゆきに

歌をお詠よませになつた巻き物で、そのほか日本文学でも、支那しなのでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになつた。帝は命婦にこまごまと大納言家だいなごんの様子をお聞きになつた。身にしむ思ひを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返事を帝は御覧になる。もつたいなさをどう始末いたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

荒き風防かげぎし蔭の枯れしより小萩こはぎが上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書かれてあるが、悲しみのために落ち着かない心で詠よんでいるのであるから

と寛大に御覧になった。帝はある程度まではおさえていねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐壺きりつぼの更衣こういの上がつて来たころのことなどまでがお心の表面に浮かび上がつてきてはいつそう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り者のような気がするとも帝はお思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して実行した未亡人への酬むくいは、更衣を後宮の一段高い位置にすえることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかも皆夢になった」

とお言いになつて、未亡人に限りない同情をしておいになつた。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人に^後の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとあの夫人は思っているだろう」

などという仰せがあつた。命婦^{みよぼう}は贈られた物を御前^{おまえ}へ並べた。これが唐^{から}の幻術師が他界の楊貴妃^{ようきひ}に逢^あつて得て来た玉の簪^{かざし}であつたらと、帝はかないこともお思ひになつた。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂^{たま}のありかをそこと知るべく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描^かいたものでも、絵における表現は限りがあつて、それほどのすぐれた顔も持っていない。太液^{たいえき}の池の蓮花^{れんげ}にも、未央宮^{びおうきゅう}の柳の趣にもその人は似ていたで

あろうが、また唐からの服装は華美ではあつたであらうが、更衣の持った柔らかい美、艶えんな姿態をそれに思い比べて御覧になると、これは花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであつた。お二人の間はいつも、天に在あつては比翼の鳥、地に生まれれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓つておいでになつたが、運命はその一人に早く死を与えてしまつた。秋風の音ねにも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになる時、弘徽殿こうきでんの女御によひはもう久しく夜の御殿おとどの宿直とといにもお上がりせずについて、今夜の月明に更ふけるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持ちをよく知つている殿上役人や帝付きの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持つた。負けざらぬ性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せているのであつた。

月も落ちてしまった。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿あさぢふ

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしな
がら起きておいでになった。

右近衛府うこんえふの士官が宿直者の名を披露ひろうするのをもつてすれば午
前二時になったのであろう。人目をおはばかりになつて御寢室
へおはいりになつてからも安眠を得たもうことはできなかつた。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合つた昔の御
追憶がお心を占めて、寵姫ちようぎの在あつた日も亡ないのちも朝の政務は
お怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしる
しだけお取りになるが、帝王の御朝食ちようざんとして用意される大床子だいしょうじ

のお料理などは召し上がらないものになつていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態をなげ歎いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困つたことであると歎いた。よくよく深い前生の御縁で、その当時は世の批難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関することだけは正しい判断を失つておしまひになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになつて政務も何もお顧みにならない、国家のためによろしくないことであるといつて、支那しなの歴朝の例までも引き出して言う人もあつた。

幾月かののちに第二の皇子が宮中へおはいりになつた。ごくお小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わつた方であつたが、今はまたいつそう輝くほどのものに見えた。その翌年立太子のことがあつた。帝の思召おぼしめしは第二の皇子

にあつたが、だれという後見の人がなく、まただれもが肯定しないことであるのを悟つておいでになつて、かえつてその地位は若宮の前途を危険にするものであるとお思ひになつて、御心中をだれにもお洩もらしにならなかつた。東宮におなりになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿こぎでんの女御によこも安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言つて一心に御仏みほとけの来迎らいごうを求めて、とうとう亡なくなつた。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになつた。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢あつた時とは違い、皇子は祖母の死を知つてお悲しみになつた。今まで始終お世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未

亡人は言つて死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになった。七歳の時に書初めふみはじめの式が行なわれて学問をお始めになったが、皇子の類のない聡明そうめいさに帝はお驚きになることが多かつた。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のな
いという点だけででもかわいがつておやりなさい」

と帝はお言いになつて、弘徽殿へ昼間おいでになる時もしよにおつれになつたりしてそのまま御簾みすの中にまでもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵きゆうてきだつてもこの人を見ては笑みえが自然にわくであろうと思われる美しい少童しょうどうであつた。こ
ありになつたから、女御も愛を覚えずにはいられなかつた。この女御は東宮のほかには姫宮をお一人お生みしてしたが、その方々よりも第二の皇子のほうがおきれいであつた。姫宮がたもお隠

れにならないで賢い遊び相手としてお扱いになつた。学問はもとより音楽の才も豊かであつた。言へば不自然に聞こえるほどの天才児であつた。

その時分に高麗人こまうどが来朝した中に、上手な人相見じようずの者が混じつていた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誠めいましがあつておできにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のようになつている右大弁うだいべんの子のようになつて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館こうろかんへおやりになつた。

相人は不審そうに頭こうべをたびたび傾けた。

「国の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拝見すると、そうなることはこの人の幸福な道でない。国家の柱石になつて帝王の輔佐をする人として見てもまた違ふようです」

と言った。弁も漢学のよくできる官人であつたから、筆紙をもつてする高麗人との問答にはおもしろいものがあつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終わろうとする期ごに臨んで珍しい高貴の相を持つ人に逢あつたことは、今さらにこの国を離れがたくすることであるというような意味の作をした。若宮も送別の意味を詩にお作りになつたが、その詩を非常にほめていろいろなその国の贈り物をしたりした。

朝廷からも高麗こまの相人へ多くの下賜品があつた。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との關係に疑いを持った。好遇された点が腑ふに落ちないのである。聡明そうめいな帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぼうとしておいでになつた。それでほとんど同じことを占つた相人に価値をお認めになつたのである。四品しほん以下の無品親王むほん

などで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終わるかしれぬのであるから、将来に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こうお決めになって、以前にもましていろいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい点の現われてくるのを御覧になると人臣にするのが惜しいというお心になるのであったが、親王にすれば天子に変わろうとする野心を持つような疑いを当然受けそうにお思われになった。上手な運命占いをする者にお尋ねになっても同じような答申をするので、元服後は源姓を賜わつて源氏の某なにかしとしようとお決めになった。

年月がたつても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判

のある人などを後宮へ召されることもあつたが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずるだけの人もないのであるという失望をお味わいになつただけである。そうしたころ、先帝——帝のみかど従兄いとこあるいは叔父君おじぎみ——の第四の内親王でお美しいことをだれも言う方で、母君のお后きさきが大事にしておいでになる方のことを、帝のおそばに奉仕している典侍ないしのすけは先帝の宮廷にいた人で、後の宮へも親しく出入りして、内親王の御幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話しした。

「お亡かくれになりましたみやすどころ御息所の御容貌ようぼうに似た方を、三代も宮廷におりました私すらまだ見たことがございませんでしたのに、後の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらつしやいますことにはじめて気がつきました。非常にお美しい方でございます」

もしそんなことがあつたらと大御心が動いて、先帝の後の宮へ姫宮の御入内ごじゅだいのことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御にょごが並みはずれな強い性格で、桐壺の更衣こういが露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになつていた。そのうちお后もお崩れかくになつた。姫宮がお一人で暮らしておいでになるのを帝はお聞きになつて、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思つて世話がしたい」

となおも熱心に入内をお勧めになつた。こうしておいでになつて、母宮のことばかりを思つておいでになるよりは、宮中の御生活にお歸りになつたら若いお心の慰みにもなろうと、お付きの女房やお世話係の者が言い、兄君ひょうふぎの兵部卿親王もその説に御賛

成になつて、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになつた。御殿は藤壺ふじつぼである。典侍の話のとおりに、姫宮の容貌も身のおとりなしも不思議なまで、桐壺の更衣に似ておいでになつた。この方は御身分に批ひの打ち所がない。すべてごりつぱなものであつて、だれも貶おとしめる言葉を知らなかつた。桐壺の更衣は身分と御愛寵いあつとに比例の取れぬところがあつた。お傷手いたでが新女御の宮で癒いされたともいえないであらうが、自然に昔は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しい御生活がかえつてきた。あれほどのこともやはり永久不変でありえない人間の恋であつたのであらう。

源氏の君——まだ源姓にはなつておられない皇子であるが、やがてそうおなりになる方であるから筆者はこう書く。——はいつも帝のおそばをお離れしないのであるから、自然どの女御

の御殿へも従つて行く。帝がことにしばしばおいでになる御殿は藤壺ふじつぼであつて、お供して源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお馴なれになつて隠れてばかりはおいでにならなかつた。どの後宮でも容貌の自信がなくて入内した者はないのであるから、皆それぞれの美を備えた人たちであつたが、もう皆だいたいぶ年がいつていた。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されてその方は非常に恥ずかしがつてなるべく顔を見せぬようになすつても、自然に源氏の君が見ることになる場合もあつた。母の更衣は面影も覚えていないが、よく似ておいでになると典侍が言つたので、子供心に母に似た人として恋しく、いつも藤壺へ行きたくなつて、あの方と親しくなりたいという望みが心にあつた。帝には二人とも最愛の妃であり、最愛の御子であつた。「彼を愛しておやりなさい。不思議なほどあなたとこの子の母

とは似ているのです。失礼だと思わずにかわいがつてやつてください。この子の目つき顔つきがまたよく母に似ていますから、この子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など帝がおとりなしになると、子供心にも花や紅葉もみじの美しい枝は、まずこの宮へ差し上げたい、自分の好意を受けていただきたいというこんな態度をとるようになった。現在の弘徽殿の女御の嫉妬しつとの対象は藤壺の宮であつたからそちらへ好意を寄せ、源氏に、一時忘れられていた旧怨きゅうえんも再燃して憎しみを持つことになつた。女御が自慢にし、ほめられてもおいでになる幼内親王方の美を遠くこえた源氏の美貌びぼうを世間の人は言い現わすために光ひかるの君きみと言つた。女御として藤壺の宮の御寵愛ちようあいが並びないものであつたから対句のように作つて、輝く日の宮と一方を申していた。

源氏の君の美しい童形をいつまでも変えたくないように帝は思召したのであつたが、いよいよ十二の歳としに元服をおさせになることになつた。その式の準備も何も帝御自身でお指図さしずになつた。前に東宮の御元服の式を紫宸殿ししんでんであげられた時の派手はでやかに落とさず、その日官人たちが各階級別々にさずかる饗宴きやうえんの仕度したくを内蔵寮くらりよう、穀倉院などでするのはつまり公式の仕度で、それでは十分でないと思召して、特に仰せがあつて、それらも華麗をきわめたものにされた。

清涼殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座の椅子いすがすえられ、元服される皇子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にできていた。午後四時に源氏の君が参つた。上で二つに分けて耳の所で輪にした童形の礼髪を結つた源氏の顔つき、少年の美、これを永久に保存しておくことが不可能なのであろうかと

惜しまれた。理髪の役は大蔵卿である。美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであつた。帝は御息所みやすじどころがこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによつて堪えがたくなる悲しみをおさえておいでになつた。加冠が終わつて、いったん休息所きゆうそくじよに下がり、そこで源氏は服を変えて庭上の拝をした。参列の諸員は皆小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はまして御自制なされがたい御感情があつた。藤壺の宮をお得になつて以来、紛れておいでになることもあつた昔の哀愁が今一度にお胸へかえつて来たのである。まだ小さくて大人おとなの頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかという御懸念もおありになつたのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わつて見えた。加冠の大臣には夫人の内親王との間に生まれた令嬢があつた。東宮から後宮にとお望みになつたのをお受

けせずにお返辞へんじを躊躇ちゆうちよしていたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝の御意向をも伺った。

「それでは元服したのちの彼を世話する人もいることであるから、その人をいつしよにさせればよい」

という仰せであつたから、大臣はその実現を期していた。

今日の侍所さむらいどころになつている座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏は着いた。娘の件を大臣がほのめかしても、きわめて若い源氏は何とも返辞をすることができないのであつた。帝のお居間のほうから仰せによつて内侍ないしが大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行つた。加冠役としての下賜品はおそばの命婦が取り次いだ。白い大桂おおうちぎに帝のお召し料のお服ひとかさねが一襲で、これは昔から定まつた品である。酒杯を賜わる時に、次の歌を仰せられた。

いとけなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめつや

大臣の女との結婚にまでお言い及ぼしになつた御製は大臣を
驚かした。

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色しあせずば

と返歌を奏上してから大臣は、清涼殿の正面の階段を下がつ

て拝礼をした。左馬寮の御馬と蔵人所の鷹をその時に賜わつた。

そのあとで諸員が階前に出て、官等に従つてそれぞれの下賜品
を得た。この日の御饗宴の席の折り詰めのお料理、籠詰めかごの菓

子などは皆右大弁が御命令によつて作つた物であつた。一般の

官吏に賜う弁当の数、一般に下賜される絹を入れた箱の多かつたことは、東宮の御元服の時以上であつた。

その夜源氏の君は左大臣家へ婿になつて行つた。この儀式にも善美は尽くされたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思つた。姫君のほうが少し年上であつたから、年下の少年に配されたことを、不似合いに恥ずかしいことに思つていた。

この大臣は大きい勢力を持った上に、姫君の母の夫人は帝の御同胞であつたから、あくまでもはなやかな家である所へ、今度また帝の御愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われている右大臣の勢力は比較にならぬほどけお気押されていた。左大臣は何人かのさいしやう妻妾からくろうと生まれた子供を幾人も持つていた。内親王腹のは今蔵人少将であつて年少の美しい貴公子であるのを左右大臣の仲はよくないのであるが、そ

の蔵人少将をよその者に見ていることができず、大事にしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず右大臣から大事な婿君としてかかずかれていたのはよい一対のうるわしいことであつた。

源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆつくりと妻の家に行つてゐることもできなかつた。源氏の心には藤壺ふじつぼの宮の美が最上のものに思われてあのような人を自分も妻にしたい、宮のような女性はもう一人とないであろう、左大臣の令嬢は大事にされて育つた美しい貴族の娘とだけはうなずかれるがと、こんなふうふうに思われて単純な少年の心には藤壺の宮のこゝとばかりが恋しくて苦しいほどであつた。元服後の源氏はもう藤壺の御殿の御簾みすの中へは入れていただけなかつた。琴や笛の音ねの中にその方がお弾ひきになる物の声を求めるとか、今はもう

物越しにより聞かれないほのかなお声を聞くとかが、せめても
の慰めになつて宮中の宿直とこのいばかりが好きだつた。五、六日御所
にいて、二、三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少
年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変わ
らず婿君のかしずき騒ぎをしていた。新夫婦付きの女房はこと
にすぐれた者をもつてしたり、気に入りそうな遊びを催したり、
一所懸命である。御所では母の更衣のものと桐壺を源氏の宿直
所にお与えになつて、御息所みやすどころに侍していた女房をそのまま使わ
せておいでになつた。更衣の家のほうは修理しゆりの役所、内匠寮たくみりょうな
どへ帝がお命じになつて、非常なりつぱなものに改築されたの
である。もとから築山つきやまのあるよい庭のついた家であつたが、池
なども今度はずっと広くされた。二条の院はこれである。源氏
はこんな氣に入つた家に自分の理想どおりの妻と暮らすことが

できたらと思つて始終歎息たんそくをしていた。

光ひかるの君という名は前に鴻臚館こうろかんへ来た高麗人こまうどが、源氏の美貌びぼうと天才をほめてつけた名だとそのころ言われたそうである。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店
1971（昭和 46）年 8 月 10 日改版初版発行
1994（平成 6）年 12 月 20 日 56 版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で
入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成 14）年 4 月 5 日 71 版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003 年 4 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。